ふれあうナカマ 育む 見守る　学校は地域と共に歩んでいます。宮城県内の小中学校の様子、自慢できることを、児童・生徒が紹介します。　育む 見守る ふれあうナカマ

わが校 わがまち スクール通信

秀光中

カナダ研修で異文化理解

これがイチオシ

400人収容 生徒が輝く場

秀光中学校のイチオシの場所はゼルコバホールです。「ゼルコバ」は英語で「ケヤキ」を意味し、名前の通りケヤキの木で2013年に造られました。とても頑丈で温かみのある色の木材が特徴的です。とても広く、約400人が座ることができ、ゆったりとした時間を過ごすことができます。

音響設備も整っていて、入学式や卒業式はもちろん、秀光祭や生徒総会など生徒たちが集まる時に使われ、生徒一人一人が自分を輝かせることができる大事な場所になっています。

学校名　仙台育英学園秀光中学校
所在地　仙台市宮城野区宮城野２の４の１
設　立　1996年
電　話　022(256)4141
校　長　加藤　雄彦
生　徒　139人

充実のグローバル教育

秀光中学校は宮城県内でも数少ない「国際バカロレア」という教育プログラムを取り入れている学校です。特色として挙げられるのがグループワークやプレゼンテーション、レポート作成です。教科ごとに課題として取り組むことで、コミュニケーション能力や自己管理能力、グローバルな視点などが身に付きます。

そんな日々の学習の集大成が10月に行われる秀光祭です。各学年で学んだことを生徒たちが劇やアニメ、ドラマ制作などの形で発表をします。個性あふれる内容で、毎年とても盛り上がります。

プログラムの一環としてカナダで行う研修「カナダGLA（グローバルリーダーシップアカデミー）」があり、さまざまな国籍の人々と出会い、一緒に活動をします。

3年生の希望者が現地に2週間滞在し、英語を話して異文化交流をし、日本との文化の違いに気づくことができます。

ボランティア活動などにも参加し、観光だけでなく現地の住民との触れ合いを通じて、多くの貴重な体験をします。

カナダGLAで現地の先生方とリーダーシップについて話し合う生徒たち

編集委員　鯨井璃緒、高橋純成、田中伶奈（３年）大野叶起、高原来遙、三浦夕愛（２年）指導教員　伊藤沙絵

次回は
燕沢小（仙台市）
津谷中（気仙沼市）

荒浜小

阿武隈川が結ぶ縁 大切に

これがイチオシ

太鼓の響き 地域明るく

荒浜小学校には20年以上前から引き継がれている太鼓の曲があります。「荒浜ぶち合わせ太鼓」と「友響」です。どちらも、私たちをずっと指導してくださっている先生が基になる曲をアレンジしてくださったと聞きました。特に「友響」は、その先生のかつての先生が作曲した特別な曲です。

今年は運動会や亘理町の夏祭りなどで披露しました。東日本大震災を乗り越え引き継がれてきた太鼓の音で「地域に元気や勇気を届けたい」という思いを胸に、全力で取り組んでいます。

学校名　亘理町立荒浜小学校
所在地　亘理町荒浜隈潟67
創　立　1873年
電　話　0223(33)2670
校　長　高橋　純子
児　童　97人

福島・川谷小と交流30年

荒浜小学校は福島県から流れてくる阿武隈川の河口近くにあります。校舎3階から、ゆったりと流れる川の水が太平洋に流れこむ様子を見ることができます。その景色は学校の自慢の一つです。

私たちは阿武隈川の源流近くにある福島県西郷村立川谷小学校と交流しています。7月には西郷村で那須甲子合宿があり、荒浜小の5年生が川谷小の5、6年生と一緒に、阿武隈川の上流で体験活動をしました。

「こんなに浅く小さな川が、あんなに大きくなるんだ！」という驚きと大きな岩を滑り台のように滑った楽しさが、一生の思い出になりました。

9月には、川谷小の皆さんが荒浜小に来てくれました。校舎から阿武隈川のゴールを見てもらうことができ、うれしかったです。亘理名物のはらこ飯を作ったり、釣り船に乗ったりして、川の恵みと海のすばらしさを一緒に実感できました。

この交流は約30年間続いていると聞いています。これからも、阿武隈川で結ばれた縁を大切にしていきたいと思います。

本年度の那須甲子合宿で阿武隈川上流の自然に触れる児童たち

編集委員　荒永志乃、熊谷紫蘭、山本大智（６年）片岡敬太、三浦まどか、森心海（５年）指導教員　斎藤颯汰、高橋洋彰

こどもエンタメ

藤本美貴さん、スノボすぐ滑れた

「NSDキッズプログラム」発表会

日本スキー場開発の「2024―2025シーズンNSDキッズプログラム」発表会が東京都内であり、お笑いコンビ「品川庄司」の庄司智春さんとタレントの藤本美貴さん夫妻がゲレンデにまつわるトークを繰り広げました。

スキーウエア姿で「似合ってるね」と褒め合った2人。「ポケットモンスター」の人気キャラクター「ピカチュウ」が描かれたレンタル用のスノーボードやウエアを前に「子どもは喜ぶし（親は子どもを）捜しやすいし、いいですね」と太鼓判を押しました。

北海道出身で元々スキーヤーだったという藤本さんは、22年の家族旅行でスノーボードに初挑戦。スクールで基礎を学びすぐ滑れるようになったといい「私、運動神経いいんですよ」と自信満々にほほ笑みました。

近年は降雪量が減る傾向にあり、数十年後にスキーができる場所が減る可能性も。庄司さんは「行けるうちに行かなきゃ」と力を込め、藤本さんも「子どももいつまで（親と一緒に）行ってくれるか分からないもんね」と、冬の家族旅行に向けて夫妻で気持ちを高め合っていました。

イベントに登場した藤本美貴さん（左）と庄司智春さん＝東京都内

河北新報の仕事 がんばった

仙台市スチューデントシティ支局員紹介

「スチューデントシティ」は、仙台市内の小学5、6年生がお仕事をして給料をもらい、買い物や納税をする「小さな街」です。河北新報社は、新聞づくりなどの仕事を体験する支局を開設しています。

北仙台小6年（1月9日）

参加した児童たちのミーティングの様子

大野田小6年（12月18日）

八本松小6年（12月19日）